

大妻精神の継承と具現

—聞き取り調査を通じ大妻の教え・学びを探る 3—

Devolution and realization of Otsuma spirit
Through interview survey-Looking for our Otsuma's mind, telling and way

高垣 佐和子¹, 井上 小百合², 里見 脩³, 上田 香十里²,
石井 雅幸⁴, 井上 俊也⁵, 櫛崎 修一郎⁶
Sawako Takagaki¹, Sayuri Inoue², Shu Satomi³, Katori Kanda²,
Masayuki Ishii⁴, Toshiya Inoue⁵, and Shuichiro Narasaki⁶

¹大妻女子大学博物館大妻コタカ・大妻良馬研究所

²一般財団法人大妻コタカ記念会

³大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科

⁴大妻女子大学家政学部児童学科児童教育専攻

⁵大妻女子大学キャリア教育センター, ⁶大妻女子大学博物館

キーワード：大妻コタカ, 大妻精神, 聞き取り調査

Key words : Kotaka Otsuma, Otsuma spirit, Interview

1. 研究目的

大妻学院は2018年に創立110周年を迎え、2020年には学祖大妻コタカ没後50年を迎える。大妻コタカの遺した業績及び建学の精神を次世代へ継承し、発展することは大妻学院として極めて重要である。

高垣らはこれまで卒業生対象の座談会やアンケート調査等により大妻コタカから受けた直接的な教え、また大妻での学び・教えなどを同窓会誌等で明らかにしてきた。

更に、平成28・29年度の共同研究プロジェクトにおいて、卒業生及び大妻コタカと交流のあった方々に対し聞き取り調査をした結果、大妻精神は「自分を磨くこと」「学び続けること」「女性の鏡」「らしくあれである」といったキーワードを引き出すことができ、大妻精神が卒業生個々の人生に影響を与え、現在なお息づいていることを明らかにした。

本研究では「出張博物館」を、大妻コタカのふるさとである広島県世羅町の『大田庄歴史館』に於いてこれまでの調査成果をふまえた大妻教育の展示を行うことで、大妻コタカに関心のある方々に来場いただき、これまで知り合うことのできなかった大妻コタカと関わった方、世羅町に所在し

た大妻女子専門学校で学んだ方々などの新たな聞き取り対象者を獲得し、次年度以降の聞き取り調査により大妻コタカが社会に果たしてきた役割、大妻精神を新たな側面から明らかにし、大妻精神の継承と具現、発展する方法を模索することを目的としている。

2. 研究実施内容

研究実施内容を第1章から第5章に分け、更に項目に区分し順次以下の内容で示した。

第1章 事前準備

- I. 2018（平成30）年6月9日
- II. 2018（平成30）年6月10日

第2章 展示内容

タイトル：世羅町大田庄歴史館第22回わたしの企画展「大妻コタカの生涯と大妻学院の歴史」

展示期間：2018（平成30）年10月29～30日・11月3～7日 7日間

- I. 全体の概要
- II. 展示内容の詳細
 1. ごあいさつ
 2. 大妻良馬
 3. 教えてコタカ先生
 4. 恥を知れについて

- 5-1 コタカの三つの苦難を乗り越えた人生
5-2 働く子女らの教育にも尽力
6. 年代ごとに区切り大妻の歴史と授業製作品、関連品の展示
6-0) はじめに
6-1) 創立者：誕生から結婚（明治17年～明治40年）
6-2) 草創期：私塾から伝習所へ（明治41年～大正4年）
6-3) 成長期：私立学校へ（大正5年～昭和3年）
6-4) 発展期：大妻学院の発足（昭和4年～昭和20年）
6-5) 転換期：新しい教育へ（昭和21年～昭和25年）
6-6) 伸展期：更なる推進に向けて（昭和26年～昭和41年）
6-7) 拡大期：総合大学へ（昭和42年～昭和60年）

7. コタカの社会的活躍

8. ふるさと世羅

9. コタカの愛郷心

10. 大妻コタカと没後の大妻学院略年譜

第3章 展示に関するアンケート結果

I 来館者数

II 来館者の年齢構成・所属・来館理由・展示評価データ

III アンケートコメント

第4章 聞き取り調査

I 聞き取り調査

II 大妻コタカとふるさと世羅のつながり

第1章 事前準備

大妻コタカのふるさと広島県世羅町で「出張博物館」を実施するにあたり現地調査と打ち合わせを実施。

I. 2018（平成30）年6月9日：世羅町大田庄歴史館（広島県世羅郡世羅町大字甲山159）に於いて、世羅町教育委員会社会教育課社会教育係 林光輝主査兼学芸員及び世羅町大田庄歴史館 成安信昭館長と面談。

面談の結果：世羅町教育委員会社会教育課では、世羅町大田庄歴史館2階企画展示室を利用し、文化・芸術に関する個人のコレクションや団体研究発表を世羅町在住の方に呼びかけ企画展を開催しており、当該研究に使用させていただくこととな

った。

日程、主催・後援、広報案、展示について打ち合わせを実施。展示準備：9/27（木）・9/28（金）、開催日：9/29（土）～9/30（日）、10/3（水）～10/7（日）＜展示期間計7日＞、後片付け：10/8（日）。主催：大妻女子大学人間生活文化研究所、共催：大妻コタカ先生顕彰会・一般財団法人大妻コタカ記念会、後援：世羅町・世羅町教育委員会。

後援については、「世羅町の後援等の承認に関する取扱要綱」「世羅町教育委員会の後援等の承認に関する取扱要綱」により承認を頂く。

展示についての世羅町での広報として、世羅町ケーブル放送にて2018（平成30）年8月から静止画告知放映、世羅町広報誌2018（平成30）年8月号『せら』にポスター掲載。

II. 2018年6月10日：大妻コタカ生家（広島県世羅郡世羅町川尻914-1）に於いて、熊田家当主熊田喜賢氏と面談。

世羅町大田庄歴史館での展示で使用するモノについて打ち合わせを実施。

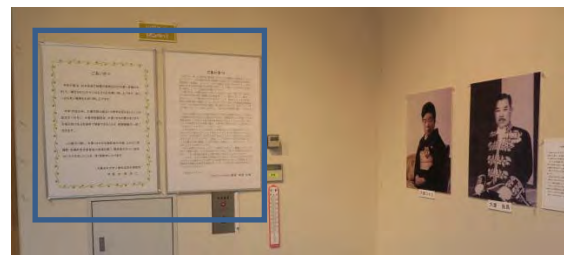
第2章 展示

展示タイトル：世羅町大田庄歴史館第22回わたしの企画展「大妻コタカの生涯と大妻学院の歴史」
展示期間：2018（平成30）年9月29～30日・10月3～7日 7日間

I. 全体の概要



展示室入口 順路の矢印



最初の壁面はごあいさつ文。大妻女子大学人間生活文化研究所 大澤所長と大田庄歴史館 成安館長のごあいさつ文。



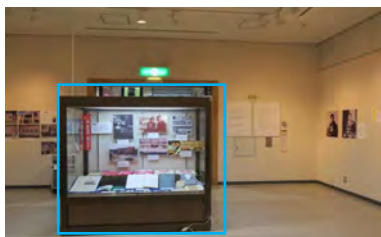
最初の壁面，順に①コタカと良馬の写真・良馬の略歴，②「教えてコタカ先生」イラストを交えた幼少期から結婚までのエピソードパネルの展示，③「恥を知れ」についての展示，④「コタカ先生の3つの苦難を乗り越えた人生」解説パネル，⑤「働く子女らの教育に尽力」解説パネル。



正面のメイン展示ケースには，年代ごとに区切り大妻の歴史と授業制作品，関連品を展示。



正面展示ケースの次の壁面側には，①1951（昭和26）年～1966（昭和41）年までのコタカの栄誉と甲山技芸学校の写真パネル。②移動型展示台に授業制作品を展示。③コタカの社会的活躍を示すパネル展示。④「ふるさと世羅」と題し，コタカと世羅に関するパネル展示。⑤「あなたの知らない大妻の歴史」のDVDを上映。



1967（昭和42）年からの大妻の歴史と授業制作品の展示。

II. 展示内容の詳細

1. ごあいさつ

・大妻女子大学人間生活文化研究所 所長 大澤清二

「今年の夏は，日本各地で地震や豪雨などの災害に見舞われました。被災された方々には心よりお見舞い申し上げます。また，一日も早い復興をお祈り申し上げます。

今年（平成30年），大妻学院は創立110周年を迎えました。この記念すべき年に，大妻学院創設者，大妻コタカの展示をコタカ生誕の地である世羅町で開催できることは，感慨無量の一言に尽きます。

この展示に際し，大妻コタカ先生顕彰会の共催，並びに世羅町・世羅町教育委員会のご後援を賜り，関係者の方々に御尽力いただきましたことを，深く感謝申し上げます。」

・世羅町大田庄歴史館 館長 成安信昭

「このたび，第22回大田庄歴史館「わたしの企画展」を開催することになりました。この企画展は町民の皆様のご協力のもとに地域の伝統文化や芸術作品，秘蔵品，コレクションなどを展示・紹介するものです。今回は大妻女子大学人間生活文化研究所主催による「大妻コタカの生涯と大妻学院の歴史」について企画展が開催されます。

大妻学院は，世羅町出身の大妻コタカが1908（明治41）年東京の千代田区の紀尾井町に裁縫手芸の塾を開くことに始まりました。爾来，大妻先生はもとより関係者のたゆまぬ努力により，開所から110余年を経て現在の大妻学院に発展しました。言うまでもなく先生は大妻学院の創始者であり，その生涯を日本女子教育一筋に捧げられました。先生のもとで学んだ教え子は，広く全国に羽ばたき，それぞれの分野で活躍しておられます。

今回の企画展では，わが郷土出身で，日本女子教育の草分けとして多大な功績を残された先生の生涯を辿りながら，授業制作などを通して大妻教育を紹介し，併せて大妻学院の歴史を振り返ろうとするものです。私たちもこの機会に先生の偉業に触れ，大妻学院の歴史を学び，その教育にかける意気込みを共有したいと考えています。

先生は校訓であった「恥を知れ」の意味を次のように説かれました。「これは，決して他人に言うことではなくて，あくまで自分に向かって言うことです。自分を高め，自分が自分の『良心』に対して『恥じるような行いはするな』ということで

す。(後略)」「大妻コタカ言行録」より)この言葉は石碑や扁額として町内各所に設置され、今も私たちに人として生き方を示し続けています。

町民の皆様におかれましては、この機会に是非ともご観覧ください、先生のご遺徳をしのび、その志を経営の中心に据えて多くの卒業生を世に送り出している大妻学院の教育の実際に触れて頂きたいと念じます。

ともあれ、今回の企画展示を開催するにあたり、並々ならぬご尽力を賜りました大妻女子大学人間生活文化研究所をはじめ、ご支援頂きました関係者に深甚なる敬意と感謝を申し上げ、この展示会のご盛会を祈念してごあいさついたします。

平成30年9月29日

2. 大妻良馬



大妻良馬 略歴

1871(明治4)年6月15日高知県高岡郡戸波(へわ)村永野に生まれ、「恥を知れ」の家訓の下に、心身共に極めて健やかな少年時代を過ごす。

長じて身を軍籍に投じ、日露の役には工兵として旅順口の攻撃に参加し、難攻不落と言われた二竜山保塁の爆破に偉功を立て、金鷄(きんし)勲章を下賜される。

1906(明治39)年5月退役、官吏として宮内省に職を奉じる。

1907(明治40)年6月熊田コタカと結婚。

1908(明治41)年9月コタカが裁縫・手芸の家塾を開くと、公務の余暇をさいて協力。

1921(大正10)年10月宮内省を依願免官し、コタカの経営する大妻学校校主に専念。

1926(大正15)年『吾等の信念』出版。

1929(昭和4)年3月17日肺炎のため急逝。57歳。

3. 教えてコタカ先生



ここでは、「教えてコタカ先生」と題し、コタカの子供時代・上京後の勉強・結婚の秘話について、イラストを交えて紹介。



①名前の由来(ゆらい)

私は田植えの真っ最中の忙しい6月21日に誕生。父は「コマッタことだ」とつぶやき、いつしかみんなは「コマッタ!コマッタ!」と私をあやした。刈り入れもすんだ頃、丸々太った私を未だ入籍していないことに気づき、名前もコマッタではこまるので、コタカにしたという。1884(明治17)年11月20日のことだった。

②学校ざらい

子どもの頃は、山の中の尋常小学校までの道が3.3キロと遠く寂しく、学校嫌いになり、母を手こずらせた。母は、父の愛が殊に深かった私を立派に育てあげたいと、毎晩のように父の話をし、目が覚めると枕許に私の好きなおやつが置いてあったりした。

③ビリから一番

やがて一緒に通う友達もでき、3年生になる頃には、学校も勉強も大好きになった。

④将来の夢

川尻尋常小学校は、校長先生と先生は一人とい

う小さな小学校で、時には、4年生が下級生を教えることがあった。私も好きな数学や体育を時々教えていた。ある日、数学を教えていると、校長先生から「オタカさん（みんなはそう呼んでいました）は手まねなどして、教え方が実にうまいね」とほめられ子供心に「将来は先生になろう」と決心した。

⑤きびしい母のしつけ

母は私が10歳くらいの頃から農業の手伝いをした。ある夕方、刈り取った生麦の束を背負って、芦田川の上の丸木橋を渡っていたとき、足をすべらせ川に落ちた。私は麦の束をそのまま川の中に置いて家に帰ると、母はすぐ取ってくるように言われた。水にぬれた麦の束は一層重く、泣き泣きびしょ濡れになって戻った。

母は「よかったね、流されないで。これは神様に、ご先祖さまに差し上げるのよ。これはお百姓の生命です」と、物を粗末にはしてはいけないということを、身をもって悟らせた。

⑥困難を切り抜ける力を育む

尋常小学校卒業後は、もっと遠い高等小学校に入学した。母は、毎朝4時に起きて、かまどに火を炊き、暖かい弁当を背負わせ、山中の危険から幼い娘を守るために、太い針を握らせ、提燈を持たせ、暗い道を一人出て行く私を励ましてくれた。

夕方は、私の提燈の灯が山あい道から見えてくるのを待ちかねて、私を呼ぶ母の声が山彦のように聞こえてきたのが今も忘れられない。母のこうした優しさと厳しさが、私の負けず嫌いの気性を育て、多くの困難を切り抜ける力となった。

⑦上京の夢は？

数学が得意だったので、物理学校（現・東京理科大学）に入り、数学の先生になることが上京の夢だった。思い切って上京。兄たちからは結婚しても役に立つ勉強であるならと、やっと許しを得て、上野御徒町の叔父の家で、朝晩家事の手伝いをしながら、裁縫の学校に通った。

⑧どんな学生生活だったか

上京後の学生生活は、朝は4時に起き、7時まで家事。家を一步出るや行く人を一人ずつ追い越しながら、歩いて九段上の和洋裁縫女学校に行き洋裁の勉強をした。帰宅すると、休む間もなく家事。翌朝の準備を済ませて、22時頃から24時頃までが私に許された時間でした。

授業中は一筋でも多く縫うこと、一枚でも多く作ることが私の念願だった。何でも覚えたい、習

いたい、そしてそれを土台に新しい工夫をしたい、と私のファイトは燃え続けた。提出物は必ず二枚提出した。一枚は習った通りに。もう一枚は、何か新しい工夫をした。

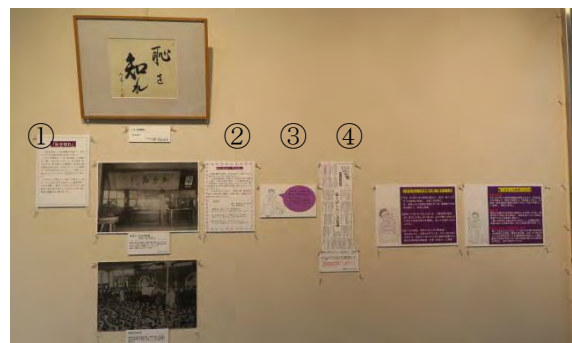
⑨コタカ 上京から開塾までの勉強の年譜

⑩びっくり結婚式

鎌倉尋常小学校に奉職して約一ヶ月ばかりたった5月下旬頃、当時近衛師団の連隊長をしていた従兄の長岡清三郎から「今度の日曜日に最近の写真を持って、赤羽の自宅に来るように」との便りが届いた。

訪れてみると、大変立派な体格で、陽焼けした顔に、きりっと結ばれた口許が、見るからにこわい感じのお客様がいらした。私なりにこの方がお仲人さんなのだろうと勝手に想像しながら叔母の指図でお給仕をした。皆がお膳につくと、盃が回り、私も真似ごとだけといわれて、お盃をいただき、「簡単ですが、これを以て三三九度の盃といたします」という清三郎氏の言葉。あつという間もなかった。驚いた私は、よたよたと台所に下がり、思わず泣き崩れた。何とかなだめられ、泣きぬれた顔を洗って、言われるとおり「よろしく願います」と丁寧に御挨拶をした。

4. 恥を知れについて



①「恥を知れ」

「恥を知れ」は大妻家の家訓で、大正6(1917)年大妻の校訓と制定された。

コタカの教育は、この「恥を知れ」の戒めに一貫して現されていた。自分自身に向けられる「恥を知れ」の言葉は、自分の人格を高める努力を怠ってはならないという意味と、自分を省みることによって「人間らしくあれ」というメッセージが込められていた。

コタカは「人間らしくあれ。女性らしくあれ、そしてあくまでも自分らしい個性を持った自分を養い、育てていきたいものです」1959（昭和34）

にそう述べているように、常に女性教育の発展を走り続けた。

②校歌に歌われた「恥を知れ」

大妻の最初の校歌は、私立学校として認可された翌年1917（大正6）年に制定された。この年山階宮邸から現在の千代田校舎の地に移転する際、これまで宮邸で借用していた建物の古材を山階宮家より特別に賜り校舎とさせていただき、華頂宮家からは不要の通用門を賜り校門とさせていただいた。

この光栄を永久に記念し、大妻が山階、華頂両宮家のご協力を得て発展した恩義に報い、校訓を心に励もうと歌われた。

③「恥を知れ」の校訓は、校章の裏、卒業記念品などに刻まれた。展示物にも校訓「恥を知れ」を見つけることができる。

④1979（昭和54）年7月8日朝日新聞朝刊 座標「恥を知れ」の校訓の学校があるという記事。

⑤コタカ揮毫額 「恥を知れ」

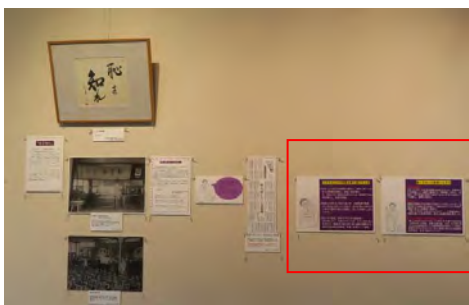
1966（昭和41）年 大妻女子大学博物館所蔵

⑥写真1 東郷平八郎元帥揮毫 校訓「恥を知れ」。

東郷元帥の屋敷は大妻学院の直ぐそばにあった。1924（大正13）年、校主 大妻良馬が直接屋敷に伺い揮毫いただいたもの。戦後、講堂の火災により焼失。1924（大正13）年

⑦写真2 東郷元帥来校

靖国神社秋季大祭参拝後、東郷元帥が大礼服のまま大妻学院で講演された。翌日の新聞で報道され、ニューヨークタイムズでも報じられた。1929（昭和4）年10月23日



5-1 コタカの三つの苦難を乗り越えた人生

①1923（大正12）年の関東大震災で前年に建てたばかりの校舎が全焼し、生徒二名が死亡。

夫 良馬と共に復興の決意をかため、福島県下の山林を購入し、校舎を再建。

②1929（昭和4）年 校主であり夫 大妻良馬が急逝。

夫に先立たれ悲しみに沈むが、自分の預かる教え子に対する責任の重さを覚醒し、悲しみの淵から立ち上がる。

③第二次大戦後、1947（昭和22）年4月公職追放に。

住む家もなく、大病もわずらうが、それに耐え自らをきたえ、1951（昭和26）年9月に追放が解除され、再び大妻学院の理事長・学長・校長として復帰。

5-2 働く子女らの教育にも尽力

①奨学金制度

1921（大正10）年同窓会組織を発足させると、学用品などを市価より一割安で販売する「供給部」を作り、収益の一部を家庭の事情で就学できない子女に学資として支給し、養成に務めた。

②編入学

昭和大恐慌の不況の時代1930（昭和5）～1931（昭和6）年、技芸学校では編入学を実施し、技芸を身につけて社会に貢献できる人材養成に務めた。「婦人も自活する能力がなければ…」と意識の高い、年齢も高い入学者が増え、自ずと授業の質も高まった。

③日本で最初の「夜間女学校」開設

働く子女のために1922（大正11）年大妻中等夜学校（各種学校）を開設、関東大震災後、1925（大正14）年からは中等学校令による夜間高等女学校として開校。昼間の高等女学校と全く同じ資格が得られる夜間の女学校は、日本で初めてだった。

6. 年代ごとに区切り大妻の歴史と授業制作品、関連品の展示



6-0) はじめに

大妻学院は、世羅町出身の大妻コタカが、1908（明治41）年東京の千代田区の紀尾井町に裁縫手芸の塾を開くことで始まる。今年が開所から実に110周年を迎える。

学院創設者大妻コタカの生涯を辿りながら、授業制作品から大妻教育をご覧いただき、大妻学院

の歴史を振り返る。

6-1) 創立者：誕生から結婚 1884 (明治17) 年～1907 (明治40) 年

<大妻学院関係>

創立者、大妻コタカは、1884 (明治17) 年山間の集落、広島県世羅郡三川村 (現世羅町) に生まれた。世羅郡立裁縫学校を卒業後、広島県裁縫教員検定に合格し、母校である川尻尋常小学校教員を半年つとめた後、18歳で上京。

上京後は、和洋裁縫学校、神奈川県小学校教員養成所 (現横浜国立大学) 等々で意欲的に学び、1907 (明治40) 年鎌倉尋常高等小学校の教員となる。そして同年、宮内省御陵係の大妻良馬と結婚。

<女子教育関係>

明治の近代となり国家の目標が『富国強兵』とされ、国民に教育することが急がれた。女子の教育において「人の性質の善し悪しは、母親の育て方によるもの」とされ女子教育の必要性が説かれた。そのために小学校には「裁縫科」が、高等女学校には良妻賢母として必要な「裁縫・家事」の教科が設置された。日清・日露戦争の間に義務教育が整備され就学率が急速に高まり、特に日露戦争1904 (明治37) 年後は、女子教育を施す学校が著しく増加した。



[1897 (明治30) 年前後に創立・創設の女子の学校]

1896 (明治29) 年 東京裁縫女学校創立 (東京家政大の前身)

1897 (明治30) 年 和洋裁縫女学校創立 (和洋女子大の前身)

1899 (明治32) 年 帝国婦人協会附属実践女学校創設 (実践女子大の前身)

1900 (明治33) 年 女子英学塾創設 (津田塾大学の前身), 東京女医学校創設 (東京女子医大の前身)

1901 (明治34) 年 女子美術学校創設 (女子美術大学の前身), 日本女子学校創設 (日本女子大の前身)

1902 (明治35) 年 戸板裁縫女学校, 東京女子体育大の前身創立。

1903 (明治36) 年 日本女子商業学校創設 (最初の女子商業学校・嘉悦), 実修女学校創設 (山脇学園の前身)

なお広島県に於いては、1883 (明治16) 年に女子師範学校が設立され、1886 (明治19) 年に広島英和女学校創立 (広島女学院の前身) されている。

<出典：大妻学院八十年史より>



①【写真】和洋裁縫女学校卒業写真。

中央に創設者の堀越千代、その右横で花かごを持っているのが熊田コタカ。1904 (明治37) 年

②【写真】和洋裁縫女学校での卒業作品のドレス。

1904 (明治37) 年。自分でデザインしたドレス。全てを新調できる環境になく、洋服の布地は木綿更紗、帽子は叔父様のお古のカンカン帽に手製の造花をあしらった。

③【写真】神奈川県師範学校 (現横浜国立大学) の卒業式。桜の下白っぽい着物が熊田コタカ 1906 (明治39) 年

④【写真】新婚の大妻良馬とコタカ。赤羽・長岡清三郎氏庭園にて 1907 (明治40) 年7月



⑤【資料】コタカ子供時代の教科書 (熊田喜賢氏提供)

「熊田コタカ」はコタカの旧姓。

⑥【資料】和洋裁縫教本 和裁編 上下。1906 (明治39) 年7月1日発行。コタカが和洋裁縫女学校で勉強した頃より3年後に発行された教科書。

6-2) 草創期：私塾から伝習所へ 1908 (明治41) 年～1915 (大正4) 年

<大妻学院関係>

コタカは結婚後、家庭に入るが、近所の人に頼まれ手芸を教え始めた。その丁寧な教えぶり、センスのよい瓶細工や袋物などの手芸品は評判を呼び、1908 (明治41) 年に15名で始めた「私塾」は1941 (大正3) 年には200名を超え、大妻芸芸伝習所の看板を掲げるに至る。

<女子教育関係>

1904（明治37）年の日露戦争後、行き詰まっ



ていた日本経済は、1914（大正3）年に始まった第一次世界大戦による好景気を迎える。女子中等教育は、こうした経済好況を反映して一段と加速し、女子の就学熱は高まった。技芸教育に対する社会的

要求の高まりを背景に、女子中等教育は拡大・発展。

①【写真】大妻技芸伝習所入口。

麹町区富士見町山階宮家邸内2番地舎宅。1915（大正4）年

②【写真】夏季講習会修了の日。

1915（大正4）年ごろ。平常の授業の他に全国の教員、一般に呼びかけて「夏季講習会」を開催。続けて冬季、春季、土曜、日曜と開いた講習会は当時としては画期的な企画だった。

③【写真】夏季講習会風景。1915（大正4）年

受講者が溢れ、廊下に机が並ぶ、縁の下にはアイロンに使用する炭の俵。



④【写真】第一回作品展覧会。1915（大正4）年4月

靖国神社の春季大祭を期して展覧会を開催し、畏（かしこ）くも山階宮両殿下の輪台を賜り、他に1200余名の入場者を算し、望外の光栄を得た。

⑤【解説】壘細工について

壘細工手芸の始まりは、江戸時代末期に一部の武士の奥方が当時流行っていたお手まりを瓶の中に入れて楽しんだことからと言われている。その

後、明治時代中期に割れにくいガラス材料が欧米から輸入されるとガラス瓶が普及する。しかし、<壘の口が小さいのに大きな物を壘の中に入れる不思議さが魅力>の瓶細工の作り方は秘伝とされ一般に普及することはなかった。

1916（大正5）年、大妻学院の創設者である大妻コタカは、学校認可が認められると学科の一つに「壘細工科」を設け、自ら壘細工の授業を担当した。また、同時に手芸をどんな人でも理解することができるように記した『家事文庫』を出版し、壘細工の項で「秘伝とされている壘細工を多数の方と楽しみを分かつことをしたい」とし、最も簡単で面白い壘細工を3種類、図を挿入して分かりやすく記した。大妻での「壘細工」の授業は、学校設立のごく初期のみだったが、その後は大妻教育の特色の一つとして春・夏・冬の休暇中に毎年開催された講習会で「壘細工」の講習も行われていた。1942（昭和17）年12月には大妻学院の指導制作品が献上品となり、壘細工も献上された。

大妻学院においての壘細工の技術は、大妻コタカから河村カタヨ、古山キンへ伝授・継承された。古山キンの瓶細工は1972（昭和47）年にオランダ王妃、モナコ公妃に、1975（昭和50）年には来日されたイギリス、エリザベス女王に献上されている。



⑥【写真】大妻指導製作献上品 壘細工。

1942（昭和17）年、大妻学院の指導制作品が献上品となり、壘細工も献上された

⑦【資料】壘細工 糸巻き

製作年月日・作者不明 大妻女子大学博物館蔵

⑧【資料】大妻コタカ著『おさいくもの新書』

手芸を誰にでも理解できるように記した書。金星堂刊 1927（昭和2）年6月 大妻女子大学博物館蔵



⑨【資料】袋物の用具 大妻女子大学博物館蔵

⑩【資料】箱迫（はこせこ）

高等女学校4年生の授業での制作品 1931（昭和6）年 一般財団法人大妻コタカ記念会提供

6-3) 成長期：私立学校へ 1916（大正5）年～1928（昭和3）年

<大妻学院関係>

大妻技芸伝習所は評判をよび、学校認可申請を勧められた。初めから学校経営を目標にしていたわけではなく、コタカは悩むが、夫、良馬の励まし、各方面から好意的な勧めを多く受けて学校にする決心をした。

1922（大正11）年、新校舎を建設するが、その翌年関東大震災で校舎が全焼し、全てを失う。しかし、教職員一丸となり復興に努め、翌年には焼失前よりも大規模な校舎を建設。学校設立から10年、コタカの社会的名声は高まり、マスコミでの活動、多くの雑誌への執筆など、社会に向けての活動も活発に行われた。

<女子教育関係>

1917（大正6）年の「臨時教育会議」において女子教育では、教育勅語の精神を徹底させるなどの方針が出された。1920（大正9）年の高等女学校令の改正により、高等女学校卒業者に対し、高度な教育を希望する者のために、専攻科、高等科の設置を認め、女子にもさらに学校で学ぶ道が開かれた。

①【写真】渋澤栄一子爵の来校

校舎（三番町）に新築中、渋澤栄一子爵が来校。前列中央の蝶ネクタイ姿が渋澤子爵、その左横がコタカ。1917（大正6）年8月

②【写真】木造5階建新校舎

校主 大妻良馬の設計により新校舎を完成。1922（大正11）年

③【写真】関東大震災で全焼した校舎跡地

1922（大正11）年に完成した校舎は、1923（大正12）年の関東大震災で全焼。1923（大正12）年



④【写真】震災後復興した校舎。校主、校長、教職員が一丸となり復興に当たり、震災の翌年には、焼失前より大規模な校舎を甦えさせた。1924（大正13）年

⑤【写真】日本初の女子勤労学生のための「大妻中等夜学校」設立。三校の看板を掲げた校門。1922（大正11）年

⑥【写真】東京中央放送局でラジオ放送中の大妻コタカ。

週に一回、裁縫、手芸、作法その他主婦や若い人たちへの心得を放送。このことが大妻の発展につながる。1926（大正15）年11月5日



⑦【写真】和服の制服姿の写真 1926（大正15）年

⑧【写真】夏用和服制服着装姿 写真出典 大妻女子大学家政学部紀要

No.23p.61～87 . 1987（昭和62）年3月発行。石井とめ子・大網美代子・小林英津子・小島かおる著「大妻学院の制服」第一報より。

⑨【写真】大妻技芸学校・大妻高等女学校職員生徒集合写真。

1921（大正10）年3月撮影 東京赤坂 日枝神社の山王男坂にて。

⑩【資料】1919（大正8）年制定和服制服 夏服 1918（大正7）年、1919（大正8）年に全国的にセーラー服が流行し、女子校の制服に洋装を採用入れるところも数校あった。しかしコタカの考えにより、大妻は学校の出発が和裁手芸の家塾であり、あえて和服の制服が採用された。大妻女子大

学博物館所蔵



⑪【資料】1919（大正8）年制定和服制服用校章バックル付の袴ベルト。

袴の紐の上にしめたベルト。バックルに刻まれた文字「大妻技芸」は大妻技芸学校、「大妻高女」は大妻高等女学校を表している。バックル裏側には校訓の「恥を知れ」が刻まれている。一般財団法人大妻コタカ記念会提供

⑫【資料】校章

袴のベルトに着用。校章の裏に校訓「恥を知れ」が刻まれている。大妻女子大学博物館所蔵

⑬【資料】大妻学校十周年記念品の文鎮

1926（大正15）年に学校認可から数えて10周年の記念式典を挙行。文鎮の裏面には、校訓「恥を知れ」が刻まれている。大妻女子大学博物館所蔵

⑭【資料】授業で制作された「ひな形・打掛」

技芸学校の授業で制作されたもの。大妻の裁縫教育の充実していたことを表している。

1928（昭和3）年制作 大妻女子大学博物館所蔵

⑮【資料】授業で制作された「ひな形・釣鐘型おくるみ」

1928（昭和3）年制作 大妻女子大学博物館所蔵

⑯【資料】授業で制作されたひな形「シャツ」「ズボン」「手甲」

技芸学校の授業で制作されたもの。大妻の裁縫教育が充実していたことを表している。

1926（大正15）年 大妻女子大学博物館所蔵

⑰【資料】1921（大正10）年大妻技芸・実科高等女学校卒業生送別記念アルバム

⑱【資料】1925（大正14）年大妻技芸学校卒業生アルバム 大妻女子大学博物館所蔵

⑲【資料】刊行物「JOCK 講演集」1927（昭和2）年

6-4）発展期：大妻学院の発足 1929（昭和4）年～1945（昭和20）年

<大妻学院関係>

1929（昭和4）年3月17日、良馬先生は肺炎で急逝。待望の財団法人大妻学院の設立は、逝去の前日付をもって認可された。やがて日本は戦争にのめり込んでいった。

大妻学院は確実に充実の途にあり、1936（昭和11）年には、鉄筋校舎が竣工。学寮等も建設された。この当時、上京して、高等女学校、専門学校等で教育を受けることは大変だったにもかかわらず、日本全国、樺太、ハワイ、北米、当時の満州からも生徒が集まった。

1945（昭和20）年の東京大空襲により、鉄筋校舎1・2階の一部だけを残し焼失した。



①【写真】大妻良馬逝去 57歳

1929（昭和4）年3月17日、コタカはこれまで共に学校の基礎を築いていた最愛の夫が急逝し、悲しみにうち沈む。しかし、自分の預かる2000余名の教え子に対する責任の重さに覚醒され、コタカは悲しみの淵から立ち上がった。

②【写真】教育勅語40年式典で奉答文を朗読するコタカ 私立高等女学校校長の代表として出席した。1930（昭和5）年10月30日

③【写真】新校舎竣工 地階共に6階建て。1936（昭和11）年6月15日

④【写真】『婦人公論』の座談会にて左から大妻コタカ、木内きよう、河崎なつ、村岡花子。1938（昭和13）年6月

⑤【写真】刺繍の授業 高等女学校生徒。1938（昭和13）年ごろ

⑥【写真】校舎内の学校工場

1944（昭和19）年1月「緊急学徒勤労動員方策要綱」が決定され、校舎内も軍需工場となった。大妻の学校工場で特記すべき事は『軍旗』の作製と偕行社の軍服縫製学校工場が設けられたこと。

⑦【写真】長野県伊那市 伊那高等女学校の学校

工場へ疎開し勤労奉仕。

1945（昭和20）年4月26日から終戦まで長野県伊那市の伊那高等女学校（現伊那弥生ヶ丘高等学校）に於いて勤労奉仕。軍服縫製指導に従事した。



⑧【資料】大妻学院 セーラー服（三角衿）復刻版

1929（昭和4）年，大妻の制服は和服から新しくセーラー服になった。デザインは，大妻コタカが考案したもので，大妻の糸まきの校章を象徴した異色のセーラーカラーだった。

現存する三角衿のセーラー服はなく，昭和初期から大妻の制服を作成している株式会社パリスが，試行錯誤の末，復刻版を作成し，寄贈した資料。

⑨【資料】刺繍基礎縫

大妻技芸学校裁縫高等科授業作品 刺繍の基礎学習作品。1938（昭和13）年 大妻女子大学博物館所蔵

⑩【資料】日本刺繍のふくさ

大妻技芸学校裁縫高等科授業作品 大妻女子大学博物館所蔵

⑪【資料】基礎縫い

大妻高等女学校授業制作 縫い方の基礎学習作品。1931（昭和6）年 大妻女子大学博物館所蔵

⑫【資料】手芸作品

大妻技芸学校裁縫高等科授業作品 竹製の口を用いた布製ハンドバッグ。1938（昭和13）年 大妻女子大学博物館所蔵



⑬【資料】手芸作品

大妻技芸学校裁縫高等科授業作品 木ビーズ製のハンドバッグ。1938（昭和13）年 大妻女子大学博物館所蔵

⑭【資料】生徒心得

1. 本校の生徒は校訓「恥を知れ」の精神を体得せよ。

1. 本校の生徒は須（すべから）く従順なれ。

1. 本校の生徒は恩義を感謝せよ。

1. 本校の生徒は自立の精神を錬成せよ。

1. 本校の生徒は須（すべから）く勤勉を尚（たつ）べ。

1931（昭和6）年 大妻女子大学博物館所蔵

⑮【資料】卒業記念品 手鏡

1935（昭和10）年3月大妻技芸学校卒業記念品裏面に「校訓 恥を知れ」と記されている。

⑯【資料】軍服縫製作業（軍服は参考展示）

校舎内にあった軍服縫製学校工場では，流れ作業では学生のためにならないと一着ずつ縫製にあたった。脇の穴かがりは，穴かがりの練習をしてから実物に取りかかった。大妻女子大学博物館所蔵

⑰【資料】防空部と記されているメガホン

戦時中に警報の伝達や避難誘導に用いられた拡声器。「大妻 防空部」と表裏に記載されている。一般財団法人大妻コタカ記念会提供



6-5) 転換期：新しい教育へ 1946（昭和21）年～1950（昭和25）年

<大妻学院関係>

コタカは焦土にしっかりと立ち，教育の復興と校舎の整備に全力を尽くした。1947（昭和22）年，コタカは突如，公職追放を受けた。そして，学制改革により専門学校は家政系の大妻女子大学となり，高等女学校は中学校，高等学校へと二部（夜間）も含めて変わっていった。

<女子教育関係>

1945（昭和20）年すべての大学・高等教育学校の門徒が女性に開放され，教育機会の均等，教育内容の「平等化」がなされた。



- ①【写真】東京大空襲の焼け跡での卒業式
中等部を含め、学校別に行われた卒業式は、大妻学院本校舎前の焼け跡で、先生も、生徒もモンペ姿で行われた。右端が大妻コタカ。1945（昭和20）年3月
- ②【写真】焼失した中庭の大妻神社に参拝
東京大空襲1945（昭和20）年3月で校舎の窓が割れ、鳥居も焼け落ちた。1945（昭和20）年3月
- ③【写真】裁縫専攻科卒業式
戦後に撮影された写真。校舎の外灯が壊れたままで、校舎には、英語の門標が掲げられている。前列中央に校長の大妻コタカ、左から5人目磯崎睦（熊田）。1946（昭和21）年3月
- ④【写真】追放中のコタカが住んだ家のジオラマ。
出版社が学寮の名目で、コタカのために用意した家。大妻女子大学博物館所蔵
- ⑤【写真】復元されたコタカの居間
家具はコタカが実際に使用していたもの。現在は大妻女子大学博物館内に復元展示されている。大妻女子大学博物館所蔵
- ⑥【資料】ひな形「袴」紙製
戦前の授業では、等身大の紙製「袴」が制作されていた。1946（昭和21）年 大妻女子大学博物館所蔵
- ⑦【資料】修了証書



大妻コタカが公職追放となり、校長代理武内貞義の名前が証書に貼られている。1948（昭和23）

- 年3月 大妻女子大学博物館所蔵
- ⑧【資料】『家庭洋裁入門講座』婦人画報社刊
コタカが公職追放中に執筆した洋裁の参考書。1949（昭和24）年
- ⑨【資料】『現代和洋裁縫全書』東京女子教育社刊。
和洋裁縫だけではなく、若き女性に送る「強く正しくにこやかに」「焦るな休むな怠るな」「仲よく働け笑って暮らせ」「おしゃべり」「人の悪口を聞くととき」も集録されている。1946（昭和21）年刊行
- ⑩【資料】和裁 部分縫 1946（昭和21）年
大妻女子専門学校専修科。表紙に校章が記されている。部分縫の製作過程が丁寧に記されている。



- ⑪【資料】洋裁 STYLE BOOK
大妻女子専門学校テキスト。1946（昭和21）年
- ⑫【資料】洋裁 Y.SHIRT
大妻女子専門学校テキスト。1946（昭和21）年
- ⑬【資料】和服袖丸み形
大妻女子専門学校専修科の授業で作成。1946（昭和21）年
- ⑭【資料】手芸 ドロンワーク習作
1946（昭和21）年 大妻女子大学博物館所蔵
- ⑮【資料】手芸 カギ編み
1946（昭和21）年 大妻女子大学博物館所蔵
- ⑯【資料】1948（昭和23）年アルバム
1948（昭和23）年大妻女子専門学校卒業記念アルバム。戦後で物資が少なく、表紙だけ印刷され、写真は印刷されず、各自で写真を貼りコメントを記してアルバムを作成。大妻女子大学博物館所蔵
- ⑰【資料】1948（昭和23）年アルバムコピー
アルバムの表紙は、手書きのイラスト印刷
- ⑱【資料】1948（昭和23）年アルバムコピー
アルバムに貼られた大妻コタカの写真と、「校長先生 大妻コタカ女史」と記されたコメント。

6-6) 伸展期：更なる推進に向けて 1951（昭和26）年～1966（昭和41）年

<大妻学院関係>

1951（昭和26）年、財団法人大妻学院は学校法

人大妻学院と改組。翌年、コタカは教職追放を解かれ理事長として復帰し、1954（昭和29）年教育功労者として藍綬褒章を、さらにその10年後には女性で初めて生存者叙勲勲三等宝冠章を受章した。



①【写真】学長・校長の河原春作と語るコタカ。

1951（昭和26）年大妻学院は、財団法人を「学校法人大妻学院」に改組し、河原春作が学長・校長に就任した。1951（昭和26）年9月11日コタカは公職追放を解かれ、1952（昭和27）年5月26日理事長に復帰し、1961（昭和36）年4月1日学長・校長に就任した。1954（昭和29）年5月

②【写真】卒業生から贈られたルノー(小型乗用車)に乗るコタカ。

戦争中に足を痛めたコタカのために卒業生が「お母さまのおみ足となるように」とルノーを贈呈。1954（昭和29）年

③【写真】教育功労者として藍綬褒章を受章。

1954（昭和29）年コタカは、1908（明治41）年ささやかな私塾を開いて40年余り、女子教育の振興に貢献したことに対する表彰を受けた。1954（昭和29）年5月3日

④【写真】勲三等宝冠章を受章。

1964（昭和39）年コタカは、教育功労者として女性初の生存者叙勲勲三等宝冠章を受けました。勲三等のお祝いに秩父宮妃からの着物、高松宮妃からの帯、元皇族山階様からいただいた帯留めをして。1964（昭和39）年4月29日

⑤【写真】コタカ甲山町立高等技芸学校長に。

1952（昭和27）年4月、コタカは甲山町の女学校復活に協力し、甲山町立高等技芸学校の校長に就任。校長代理は大妻の卒業生磯崎睦が務めた。写真は開校式。

⑥【写真】大妻女子大学学生寮

寄宿舎、学生寮は学校開設当初から、地方から学びたい人のために用意された。昭和30年代になると女子の短大進学率が急増し、寮施設の整備がなされた。寮生たちはコタカの来訪を心待ちにした。1963（昭和38）年11月20日

⑦【写真】アルバイトの男子学生も学内に居住。

コタカは、学校の夜警として信頼の置ける親戚の男子学生に依頼をし、学内に居住させた。

1957（昭和32）年7月12日

⑧【新聞記事】女性は塩のごとく。

1963（昭和38）年1月6日、中国新聞のインタビュー記事。1963（昭和38）年1月6日



⑨【資料】基礎縫

短期大学部家政科の授業制作品。基礎縫い各種。1954（昭和29）年

⑩【資料】手芸 テネリーフレース習作。

家政学部被服学科の授業制作品。8種。1955（昭和30）年

⑪【資料】手芸 テネリーフレースの道具

⑫⑬【資料】手芸 ドロンワークのハンドバッグ。短期大学部の授業制作品 1955（昭和30）年

⑭【資料】校歌オルゴール

校章と「恥を知れ」のプレートが付いている卒業記念品のオルゴール。オルゴールの曲は、1953（昭和28）年の創立45周年で新しくなった大妻学院の校歌。1966（昭和41）年 大妻女子大学博物館所蔵

⑮【資料】校章

大妻女子大学、大妻高等学校、大妻中学校の校章。裏面に校訓「恥を知れ」が刻まれている。1966（昭和41）年 大妻女子大学博物館所蔵

⑯【資料】 創立45周年記念品の酒盃

「感謝 大妻学院四十五周年」と記され、盃の内側には校章が金字で記されている。1953（昭和28）年 大妻女子大学博物館所蔵

⑰【資料】 創立50周年記念品

コタカの字で『感謝』と染められた小風呂敷。創立50周年の式典は、大妻学院の隆盛に力を尽くしてくださった方々への「感謝の集い」として挙行された。1953（昭和33）年 大妻女子大学博物館所蔵

6-7) 拡大期: 総合大学へ 1967 (昭和 42) 年～1980 (昭和 60) 年
 <大妻学院関係>

1967 (昭和 42) 年文学部が新設された。コタカは、夫 大妻良馬存命中に掲げた「将来は総合大学に」という夢の実現に向けて歩み出した。



①【写真】創立 60 周年記念式典

1968 (昭和 43) 年, コタカは創立者自ら 60 周年記念式典を日本武道館に於いて主催した。

1963 (昭和 43) 年 10 月 30 日

②【写真】狭山台校キャンパスを開校。1967 (昭和 42) 年開学 2 年目の狭山台校キャンパス。

1967 (昭和 42) 年, 埼玉県入間市に狭山台キャンパスを開校。写真は狭山台キャンパス。家政学部を充実 (被服学科・食物学科・児童学科) させ, 文学部 (国文学科・英文学科) 及び短期大学部に国文科・英文科を新設した。

③【写真】最後の同窓会へ

1969 (昭和 44) 年 11 月 2 日～30 日, コタカは亡くなる 50 日前に名古屋, 京都, 広島などの同窓会に出かけた。写真は, 名古屋駅で。1969 (昭和 44) 年 11 月 17 日

④【写真】広島県で開催された全国高等学校総合体育大会へ。

「わたしの学校の生徒が出場するのだから, どうしても私も出てあげたい」1968 (昭和 43) 年広島県で開催された全国高等学校総合体育大会の開会式に出席のコタカ。「勝ち負けも大切だが精一杯やればいいのだから」と生徒を激励。1968 (昭和

43) 年

⑤【写真】広島県で開催された「昭和 43 年度全国高等学校総合体育大会」

⑥【写真】大妻コタカ葬儀

1970 (昭和 45) 年 1 月 3 日, コタカは入院中の東京女子医大病院で永眠。85 歳。

⑦【写真】大妻高等学校バスケット部・軟式テニス部日本一に

1973 (昭和 48) 年, 第 26 回全国高等学校総合体育大会において, 大妻高等学校のバスケット部と軟式テニス部がそろって日本一になる。



⑧【資料】寝具 テキスト

⑨【資料】寝具 1/5 縮尺

家政学部被服学科の授業で制作。1/5 縮尺で作製された寝具 (マットレス・敷き布団・カバー式掛け布団・三角町カバー・小判型カバー) 1968 (昭和 43) 年ごろ

⑩【資料】大妻英字新聞 The Apple

1970 (昭和 45) 年 10 月刊行の大妻英字新聞。英文学科・英文科の学生により刊行された。1970 (昭和 45) 年 10 月

⑪【資料】1979 (昭和 54) 年度学校案内

コタカ亡き後, 学長には内藤誉三郎 (大平内閣で文部大臣を務める) が就任した。文学部では, 第 4 代文学部長として日本の国文学者である吉田精一が務めた。1979 (昭和 54) 年

⑫【資料】洋裁ノート

家政学部被服学科の授業ノート。分かりやすく記されている。1968 (昭和 43) 年ごろ

⑬【資料】洋裁 原型 (基本となる型紙・服の設計図) の 1/4, 1/5 の縮尺

縮尺定規には大妻の校章がプリントされている。1968 (昭和 43) 年

⑭【資料】和裁ノート

表紙には大妻の校章, 和裁指定のノート。1968 (昭和 43) 年ごろ

⑮【資料】男児服 上着とズボン

家政学部被服学科の授業で製作。1968 (昭和 43) 年ごろ

⑯【資料】提出用紙

制作品は, この提出用紙を付けて提出し, 先生

のチェックを受けた。正しく製作できていない場合は、「お直し」となった。 1968（昭和43）年ごろ

⑩【資料】大妻学院創立70周年記念の手鏡

1978（昭和53）年、大妻学院創立70周年を迎え、「恥を知れ」と表に刻まれた手鏡が記念品として配られた。

7. コタカの社会的活躍

女子教育勃興期時代に一番若い校長として。

女子教育の勃興時代、津田、嘉悦、下田、鳩山、堀越、三輪田、跡見、山脇、戸板、吉岡、桜井ら十指に余る著名な女流教育家が東京都内に一流女学校を開いて盛況を呈し、すでに名門校となっていた。

このような女子教育勃興期時代に大妻は遅れて誕生したが、大妻コタカは一番若い校長としてこれらの先輩の先生方と伍して活躍をした。



夏季講習会案内

学びたい人に学びやすく、いつからでも誰にでも対応する個人教授で人気を博した。遠方の方で宿泊を希望する方は、校内に宿泊の便をはかった。1927（昭和2）年大妻時報より

8. ふるさと世羅

ここでは、コタカのふるさと広島県世羅町について、コタカを育んだ世羅町が、江戸時代から女子教育に力を注ぐ地であったことを展示で紹介。



①【写真】三川ダムの湖底に沈む前の久恵（くえ）地区の集落。

○で囲った箇所がコタカの生家、熊田家である。

②【写真】現在の三川ダム

この湖底にコタカのふるさと久恵が沈んでいる

③【写真】1950（昭和25）年春

久恵住民の集まり前から2列目右から5人目がコタカ。

④【写真】三川ダムの湖底に沈む前の久恵地区の集落

三川ダムの湖底に沈む前の生家。コタカがとった道。

⑤【写真】大妻コタカ（旧姓熊田）の生家

もともと旧甲山町（現世羅町）久恵地区にあったが、三川ダム建設〔1949（昭和24）年着工・1960（昭和35）年完成〕に伴い、現在の神農湖畔に生家の一部は移築された。

⑥【写真】今高野山総門

室町時代創建の総門をくぐり、熱心に学ぶコタカ15歳の姿が目に浮かぶ。

⑦【写真】この広場に多田道子裁縫所があった。

多田道子裁縫所は、高等小学校を修了したコタカが通った学校で、その裁縫所跡は県指定の史跡となっている今高野山の中にあった。

多田道子裁縫所は、女子といえども学問の重要性を説いた父親の影響で1897（明治30）年に創設され、その2年後に入学したコタカは多田道子から大いに影響を受け、さらなる向学心を育み上京のきっかけとなったものと思われる。

⑧【写真】多田道子裁縫所（世羅郡裁縫所）集合写真

龍華寺の石段で撮影されたであろう世羅郡裁縫所時代の写真。前列右から3人目がコタカ（15歳）。1899（明治32）年撮影。写真撮影の場所は、左側の写真⑨の階段だと思われる。



⑩【写真】寺子屋「丘隅舎（きゅうぐうしゃ）」跡

江戸時代，世羅町の極楽寺内に寺子屋「丘隅舎」があり，多田道子も女子でありながら学ばれた。男尊女卑の時代にあっても，多田道子は父親の勧めによ

り寺子屋で勉強した。

⑪【写真】多田道子墓石

多田道子は，1873（明治6）年，多田正像の長女として生まれ，神戸英和女学校及び広島師範学校で学ぶ。その後，郷里で多田道子裁縫所の教授をしていたが，発憤して東京の学校へ行き，心理・家政の二科を修めた。

甲山・私立裁縫所，郡立女学校（のちの甲山高等女学校，世羅高等学校の前身）の創立者となり，若干39歳で亡くなった。向学心に燃えていたコタカは，多田道子が東京に出たのをきっかけに，1902（明治35）年，東京を目指してふるさとを旅立った。

多田道子との出会いは，コタカにとって人生のターニングポイントではないか。

⑫【写真】世羅町立せらひがし小学校

この小学校は120年以上も前にコタカが通った川尻尋常小学校のあった場所。

⑬【写真】「強く正しく朗らかに」

ここにはコタカが揮毫した「強く正しく朗らかに」（縦50cm×横161cm）の額が掲げられている。

⑭【写真】甲山中学校

校庭に設置されている大妻コタカの書による「愛郷崇祖」の石碑。

（縦62.5cm×横124.7cm×厚さ19.8cm）

⑮【写真】「愛郷崇祖」

甲山中学校ではコタカの教えを学び，修学旅行では毎年大妻学院を訪問されている。この「愛郷崇祖」の言葉は，教育目標の一つである「郷土に貢献できる生徒の育成」に通じるものとして大切にされている。



⑯⑰【写真】世羅高等学校

世羅高等学校に残るコタカ揮毫の「楽学自尊」の額。

（縦68cm×横137cm 額の大きさ 縦90cm×横180cm）世羅高等学校は駅伝で有名な学校。

この世羅高校は世羅高等学校，甲山高等学校が統合されたもので，甲山高等学校の前身をたどっていくと甲山高等女学校，さらにはコタカが学んだ多田道子裁縫所までさかのぼる。

9. コタカの愛郷心



1951（昭和26）年，甲山町の兼広精一町長が上京し，「永年休校していた甲山の女学校を復活したいので協力を願いたい」と申し出があり，郷里への協力が始まった。『甲山町立高等技芸学校』として町立の中学校の一棟を借り，大妻学院の卒業生である磯崎睦（のち熊田）が校長代理を務めた。

1958（昭和33）年，校舎建築のため，コタカは宮沢喜一参議院議員（当時）にお願いする傍ら，愛郷心を訴え，不自

由な足を引きずり，建築資金の寄付に廻り，当時の池田勇人総理をはじめ大勢の協賛を得て，1959（昭和34）年新校舎が落成した。

その後『甲山町立大妻女子専門学校』『甲山町・世羅町学校組合立大妻女子専門学校』と改称し、時代の変遷の中、1981（昭和56）年29年の歴史に幕を下ろした。

①【写真】甲山町立甲山高等技芸学校

1959（昭和34）年12月4日、新校舎（現・森林組合の建物）落成式。前列中央にコタカ、その左は宮沢喜一参議院議員（当時）。

②【写真】旧大妻女子専門学校跡に残る石碑

コタカが校長を務め、地元でも大妻の教育が受けられるとして長く存続した大妻女子専門学校1952（昭和27）年～1981（昭和56）年の校舎跡。コタカが建設に奔走した当時の校舎が今もそのまま残っており、現在は森林組合が使用している。

縦40cm×横124.5cm全体の大きさ 縦142cm×横214cm×厚さ40cm

10. 大妻コタカ没後の大妻学院略年譜

[大妻コタカ没後の大妻学院略年譜]

- 1978（昭和53）年 創立70周年記念式典挙行
 1988（昭和63）年 東京都多摩市唐木田に多摩校開設、短期大学部生活科・日本文学科・実務英語科設置、大妻多摩高等学校設置
 1989（平成元年）年 創立80周年記念式典挙行
 1992（平成4）年 社会情報学部情報学科設置
 1994（平成6）年 大妻多摩中学校設置
 1998（平成10）年 創立90周年記念式典挙行
 1999（平成11）年 人間関係学部(人間関係学科、人間福祉学科)・比較文化学部(比較文化学科)設置
 2001（平成13）年 短期大学部生活科・日本文学科・実務英語科廃止
 2002（平成14）年 家政学部ライフデザイン学科・文学部コミュニケーション文化学科設置
 2003（平成15）年 短期大学部家政科第二部廃止
 2006（平成18）年 学校法人大妻学院100%出資の(株)大妻サポート設立
 2008（平成20）年 創立100周年記念式典挙行
 2011（平成23）年 短期大学部家政科生活総合ビジネス専攻設置
 2013（平成25）年 学校法人大妻学院が学校法人誠美学園を吸収合併
 2015（平成27）年 狭山台校閉校
 2018（平成30）年 創立110周年を迎える

第3章 展示に関するデータ・アンケート結果

入館者数とアンケート結果のデータから展示状

況を以下に示した。

I 来館者数から

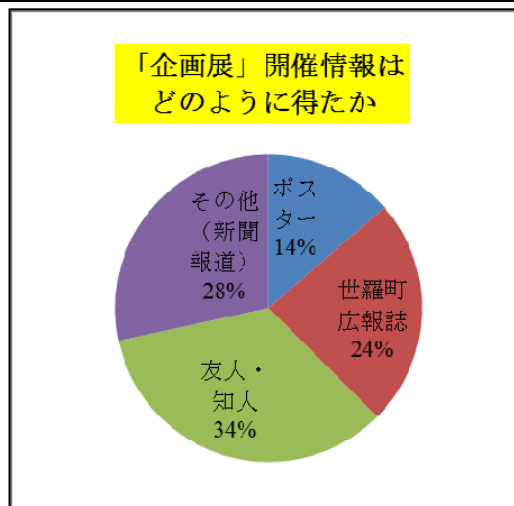
9月29日（土）	22名	
9月30日（日）	7名	※台風24号の影響
10月3日（水）	31名	
10月4日（木）	30名	
10月5日（金）	47名	
10月6日（土）	51名	
10月7日（日）	42名	
合計	230名	

7日間の会期で230名の来館者数は、世羅町大田庄歴史館におけるこれまでの企画展の中で最多来館者数となり、世羅町地域において大妻コタカへの関心の高さを表しているといえる。

II アンケート結果から

来館者のうち希望者にアンケートを実施し、回答は87件、来館者総数の約38%から得たデータ内容を次に示した。

問1.「企画展」開催情報はどのように得たか。



企画展に来館開催情報を得た手段として、友人・知人からの回答が34%と一番多く、次いでその他「新聞報道」によるとの回答が28%と想定外に多く、一般に大妻コタカへの関心が高いことを示している。

以下に新聞報道の概要を示す。

1) 中国新聞「コタカ顕彰世羅の魅力に」2018（平成30）年9月30日付朝刊、24面。本企画展について「足跡触れる好機」と展示をアピールする記事が掲載された。

2) 読売新聞「大妻学院創始者の足跡 世羅出身大田庄歴史館で150点」2018（平成30）年9月30日付朝刊、29面。展示風景写真とともに一般財団法人大妻コタカ記念会会長のコメント「女性は

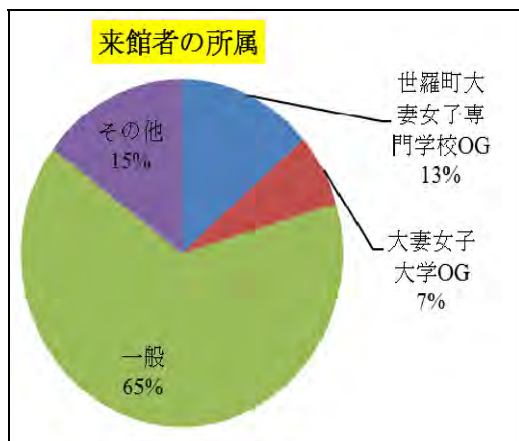
自立して、世のため、人のために尽くしなさいと言われていた。苦難を乗り越えて学校を発展させた力強さや、誰もが勉強できる環境作りをしたことを多くの人に知って欲しい」が掲載された。

3) 中国新聞「コタカの生涯たどる 郷里の世羅で企画展」2018（平成30）年10月3日付朝刊、25面。展示風景をカラー刷りで掲載、コタカは早くに両親を亡くすなどの困難を乗り越え、女子教育の発展に尽くし、「功績を郷里の人たちに広く知ってほしい」と再度展示をアピールする記載された。

4) 東京新聞「功績継承へ連携」2018（平成30）年10月3日朝刊、23面。『話題の発掘』で中国新聞の記事が紹介された。

5) 山陽日日新聞「世羅の大田庄歴史館で 大妻コタカの生涯と大妻学院の歴史」2018（平成30）年10月7日朝刊。世羅町甲山の大田庄歴史館で、明治時代に世羅町から東京へ出て、女子教育に尽力した大妻コタカを紹介する企画展が開催されていると報じられた。

問2. 来館者の所属



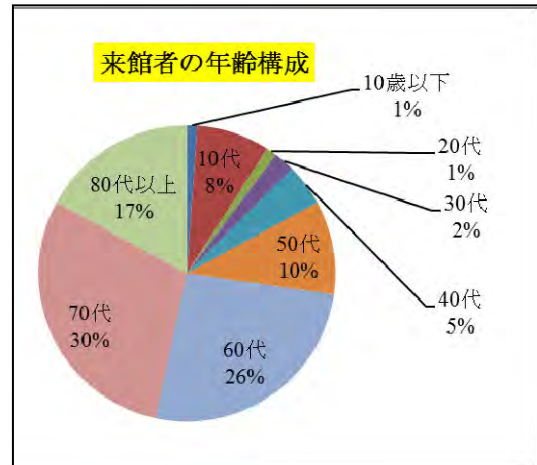
来館者所属は、半数以上が一般（地域住民）であった。地域の方が「大妻コタカ」に関心を寄せていることを示している。

大妻精神を継承し、発展するために一般（地域住民）の方にどのように大妻コタカ精神が根付いているかを調査し、今後一般の方を通じて世羅町での大妻精神の継承を検討模索することが可能だと分かった。

来館者所属として世羅町大妻女子専門学校OGと大妻女子大学OGが多く、世羅町以外の広島県内遠方地域よりわざわざ展示に来館され、それぞれの母校と大妻コタカへの篤い思いを語られた。今後更に聞き取り調査を進め、大妻精神の継承と

発展に繋いでいかなければならないと分かった。

問3. 来館者の年齢構成



来館者の年齢構成は、60代以上が73%を占めている。

世羅町企画課（2018）「統計データブック」。住民基本台帳（2018年3月末現在）人口ピラミッドによると、世羅の人口構成は、55才以上が多くを占め、男女ともに65～69才の人口の割合が最も多いとあるが、当該企画展の来館者の割合は、世羅の人口平均よりも高い年齢の層の方が多く来館されている。このことから、高齢者が大妻コタカに関心を寄せていることが分かった。

2020（平成32）年に大妻コタカ没後50年を迎える今、大妻コタカに関する情報収集・聞き取り調査は早急に実施する必要があることを示している。

来館者所属の年齢構成データで示す10代の来館者は8%で、そのうち甲山中学校の生徒が多くを占めた。

これは、世羅町教育委員会では、学校教育基本方針「世羅町教育プラン」の4本柱の1つを「郷土への誇りと国際感覚をもった人材を育てます」と掲げ、『ふるさと学習の推進』をうたっている。

甲山中学校では、『ふるさと学習の推進』として、大妻コタカの言葉である「愛郷崇祖」を取り上げ、生徒が郷土の誇りである大妻コタカについて学習、調べまとめ、その結果を、広島県教育の日である11月1日「輝くせらの学校文化祭」で発表している。

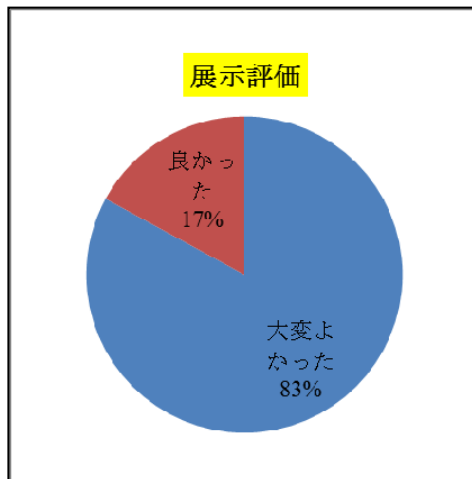
地域の先輩方や歴史に触れ、郷土を愛する気持ちや、先輩方の生き方から自身の生き方を見つめる学習により、よりよく生きようとするための道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育む教育がなされ、教材として大妻コタカの生涯が取り上げられ人材育成をなされている。このことは、大

妻精神が継承されていることを示している。

本研究の目的である大妻コタカ精神の継承と具現を発展させるために、世羅町住民と甲山中学校との「域学連携」を実現させることも次年度以降検討する必要がある。

問4. 展示評価

展示評価はデータで示すように好評であった。大妻コタカが生誕の地で受け入れられ、尊敬されていることを示している。



Ⅲ アンケートコメント

アンケートコメントの多くは、展示を通じて、大妻コタカが世羅町の名誉町民である理由を理解し、大妻コタカは郷土の誇りである、大妻コタカの魅力再発見した、感動したと記している。

次にコメントを年代別に記す。

1. 10代

- ・コタカ先生の生涯だけではなく、大妻良馬さんの生き様にも触れてみたいと興味があった。
- ・難しい展示ではなく、見やすい展示。絵などで分かりやすい展示があり、大妻コタカさんの歴史について良くわかった。
- ・「輝く世羅の学校文化発表会」で発表するので、大妻コタカさんの生き様をしっかり紹介できるよう頑張りたい。
- ・大妻コタカ先生の生涯について、自分が知らなかったことについて知ることができた。貴重な資料などの展示により、時代背景とともに大妻コタカ先生、大妻良馬先生の大妻女子大学の創立について知ることができてよかった。
- ・コタカさんは大妻学院のために生涯をつくっておられ、とてもびっくりした。
- ・こたかさんの子供のころの出来事がよくわかっ

た。

- ・今回知れたことを学校に帰ってからしっかり活かして、みんなに広めていきたい。
- ・今回初めて展示で、今まで知らなかったことをたくさん知ることができた。良馬さんは、コタカさんに比べて表に出られることが少ないが、大学設立ができたのは、良馬さんの力があつたからこそだとわかった。
- ・もっと知りたいと思ったし、大妻さんの教えを活かしていきたいと思った。またコタカ先生の生家「ごもくめし」にも行ってみたいと思った。説明もわかりやすく、本当に学ぶことが多かった。昔の写真がよく保存されていたと思います。

2. 20・30代

- ・模型が素晴らしかった。
- ・とても感動しました。大妻の卒業生として感慨深い物を感じ、またとても勉強になった。貴重な資料が展示されていたので、とても良かったです。

3. 40代

- ・母が卒業生という事もあり、大変興味深く見せていただいた。母の若き日に大妻コタカ先生は欠かすことができないので、有意義な時間だった。
- ・良かったので、もっと長い期間展示があれば良いと思った。
- ・大変勉強になった。

4. 50代

- ・母が卒業生なので一緒に見せてもらった。母の思い出と共に私の思い出にもなった。
- ・マンガ、イラストは見易くてよかった。
- ・小さい頃のエピソードパネルやスライドショーでコタカ先生の人柄も歩まれた歴史がよくわかった。展示期間がもっと長ければよりたくさんの方に来ていただけるのではないかと思います。

5. 60代

- ・感動しました。大変よく内容がわかった。
- ・とても懐かしい思いがした。大妻コタカ先生の教育を受けたことが出来嬉しく思った。
- ・大妻卒業して良かったと改めて分かった。
- ・展示を見て、背筋がピンとした。「焦らず・休まず・怠るな」今の私の教訓にしなければいけないと、心に刻み込んだ。
- ・改めて大妻コタカ先生の偉大さに感動した。そして、その卒業生として誇りに思った。
- ・大いなる先生の志が後々に伝えられ、残されることを願っている。
- ・この地域から大妻女子大学の創設者が出られた

ことを初めて知った。

- ・世羅について新しい知見を頂けた。
- ・大妻先生を身近に感じられた。
- ・これまで話を聞かせてもらったり、少しばかり本を読ませてもらったりと僅かな情報でコタカ先生を知っていたが、こうした貴重な資料を展示いただいて触れさせていただくと改めて大妻先生の素晴らしさを感じる事が出来た。
- ・技術は勿論、人間的な魅力を感じた。展示内容がとても分かりやすく、親しみやすく、つい入り込んで見るような工夫がされていて、とても良かった。
- ・和裁を少し習った時に、大妻コタカさんの和裁書を見たことがあり、どんな方かをここで知ることが出来た。
- ・大妻コタカ先生をより深く知ることが出来る素晴らしい展示だった。手芸作品なども展示されており、コタカ先生の生き様を実感できたように思った。コタカ先生の常設展が世羅にあるべきだと思った。コタカ先生は世羅の宝。
- ・教育の世羅を改めて実感した。
- ・なぜ世羅が女子教育の発火点となり得たのだろうか、多田道子先生についてももっと知りたくなった。
- ・世羅町出身の大妻コタカ先生のさまざまな展示を見せていただき大変懐かしく、当時の歴史を振り返ることが出来た。
- ・地元の歴史が興味深く楽しかったです。名前はよく知っていましたが、とても身近に思った。
- ・大妻先生のご立派な生き方、ストーリーを是非とも全国発信。世羅から始まったいきさつ、歩みなどをアピールしていただきたい。
- ・非常に興味深い展示で、私自身書籍で知るくらいだったがスライド等で知り得て有意義な時だった。世羅町民が誇りをもって知っていただきたい企画展だった。

6. 70代

- ・とても懐かしく思い出した。50年以上前の事。恩師の方々の写真、お世話になった先輩の方々、涙が出てしまった。大妻先生のお陰で現在の自分があるのだと感謝している。
- ・大妻コタカ先生の偉大さに改めて感銘を受けた。郷土の誇りであり、これからも末永く顕彰して行きたいと思った。
- ・大変工夫された展示だった。コタカ先生の一生をイラスト、これがいい！文章も簡潔で素晴らし

く、感激した。

- ・すばらしい人格者の学校へ行かせてもらったことを親に感謝。企画に選ばれている物が素晴らしく見事だった。
- ・たくさんの資料にびっくりした。たいへんなご苦勞があったことを知ることができて、とても有意義な日となった。
- ・もう少し期間が長ければ皆さんにお知らせできると思った。
- ・大妻コタカ先生の生涯と歴史がよくわかった。
- ・郷土から大変立派な方が出られてとてもうれしく思った。
- ・先生の意志の強さ、一貫した生き方、女性の教育に取り組まれた生涯に感動した。現代にいてほしい方だと思う。
- ・知らないことがたくさんあった。ありがとうございました。増々の発展をお祈りします。稲田さんのミニチュア模型作品にも感動した。
- ・郷土にこのような偉大な方がいらっしゃることは大変光榮に思う。
- ・すべてに感動しました。特に若い世代に見てほしい。
- ・偉大な先生が甲山出身で、有り難く見させていただいた。
- ・テレビなどで知っていたが、身近に感じすごい人だと痛感した。甲山の歴史上に残る立派な方と深く知り得たこと、心に残った。
- ・展示期間が少し短いと感じた。
- ・甲山に技芸学校があり、友人も何人か学んだ。多田先生と女子教育に貢献されたことは知っていたが、今日の展示を見てあまりにも立派な活動をされたことを思うと、郷土の誇りだととてもうれしく思った。
- ・資料を大切に保管されていることに感心した。良い展示会を開催されたことに感謝。
- ・久恵地区も懐かしいです。

7. 80代以上

- ・この展示に至るまでのご苦勞を思い、感謝の気持ちでいっぱい。地域子どもたち(中学生)が文化祭などでも発表すると聞き、嬉しい。
- ・大妻コタカ先生 ここにありと旗を揚げてくださいほんとに感謝。卒業生として嬉しい。
- ・なつかしい。子供のころ、大妻先生が一里歩いて通った、手に針をもって通った話を大人から聞いた。

- ・今までの展示会で知らなかった資料も沢山あり、来てよかった。
- ・当時の写真を拝見して昔を思い出して、大変懐かしく時間を過ごした。
- ・映画製作の際、大妻先生のお名前を耳にし、大変興味があった。深く知ることができた。
- ・甲山町よりすばらしい先生がおられた事、とてもうれしいです。
- ・大妻学院とは縁はないが、このような展示を観る機会を与えてもらって、いづらか知ることが出来た。
- ・「身近にある」とか「自分の周辺にある」ことについては案外無知なことが多い。殊に、遠くにある、遠く離れていけば、偉大さも、立派さも、解らずじまいになってしまう。そんな思いで郷土の立派な教育者のことを教わった。

第4章 聞き取り調査

I 聞き取り調査

来館者に声をかけ聞き取りを実施した。町立大妻女子専門学校卒業生・関係者への聞き取りからは、自らが受けた大妻教育がその後のキャリアに大きく影響していることが分かった。一方、町立大妻女子専門学校卒業生・関係者以外からは、コタカが世羅に大きな影響を与えたことが分かった。

(1) 町立大妻女子専門学校卒業生・関係者 はじめに

甲山町立大妻女子専門学校と大妻コタカの関わりについて記す。

1951(昭和26)年の暮れ、当時の甲山町長が、農村子女の婦徳涵養を目的とした町営の女学校を甲山町に復活させたいと東京の大妻コタカ宅を訪れ依頼したことに始まる。

校長就任を依頼されたコタカは、郷里のためにお手伝いをするが遠方のため年に2、3回しか出席できないが…と言うと、それでも良いとのことで校長を引き受け、1952(昭和27)年4月「甲山町立高等技芸学校」が甲山中学の一部を間借り設立した。

1958(昭和33)年には独立した校舎を建築。建築資金は寄付によるもので、コタカが不自由な足をひきずりながら在京広島県出身者の知名人を訪ね歩き、愛郷心を訴え協賛を得て1959(昭和34)年に独立校舎が落成した。

1960(昭和35)年には大妻の名前を入れた「甲山町大妻女子専門学校」と改称。その後、「甲山町・

世羅町学校組合立大妻女子専門学校」と改称し、時代の変遷の中、1981(昭和56)年に29年の歴史に幕を下ろした。

①80代・女性・1954(昭和29)年師範科卒業

高校を卒業後、都会に出て学ぶことがままならない時代、近隣の甲山町に学術技芸を实地に身につけることのできる学校が設立され、学ぶことができたことは有り難いことだった。

設立当初「甲山技芸学校」の校舎は甲山中学の一部を間借りし、大妻コタカ校長に代わり担当責任者として赴任された大妻の卒業生である熊田睦(磯崎)先生が校舎の中に住んでいた。板を張り巡らし、畳を敷いただけの職員室は宿直室の兼ねていた。それは、板壁の隣は野草が生え蛇でも出てきそうな部屋で、教室でテント生活をしているのと同じだった。当時を振り返ると胸に迫る壮絶な環境だった。熊田睦(磯崎)先生は就寝時、護身用に刃物を忍ばせていたと晩年耳にした。

大妻コタカ先生も年に数回甲山町に来た時は、旅館に泊まらず校舎内の宿直室に何日も過ごされていた。

このような大妻先生、熊田先生の町のために献身的に尽くされる姿は、周囲に伝わり、多くの方が協力した。

熊田先生は、甲山町でも東京の大妻と同じような授業ができるように努力され、師範科クラスで壇細工の授業を実施するために、東京に出かけられる都度、大きな壇細工用のピンを大切に抱え帰られた。今のように宅配便もない時代、先生の苦勞がしのばれる。甲山町で少しでも良い教育をされたいという先生方の篤い思いがあり、この時作成した壇細工は宝物である。

②80代・女性・1954(昭和29)年師範科卒業

夏休みに熊田睦(磯崎)先生の東京に住む親戚の家に泊めていただいたことがある。東京に出ることがなかったので嬉しいことだった。甲山からお米や野菜を持って東京に出かけ、熊田先生の親戚宅で自炊をした。

その時、コタカ先生から直々に摘み細工の作り方を教示いただいた。また、にぎり寿司の食べ方、手を組むときは右手を下になど日常の何げないことを教えていただいた。

③70代・女性・1959(昭和34)年師範科卒業

婦人会などで子供の頃から親に連れられ大妻コタカ先生の講話を聞くことがあった。何げないこといろいろ教えてくださる大妻先生の話の聞けば、

みな先生の魅力に引きつけられたものだった。

高校を卒業し、当たり前のように大妻女子専門学校で学んだ。親だけでなく親戚、近所の方もみな大妻先生の学校で学ぶのが当たり前の時代だった。閉校してしまい残念だ。

大妻女子専門学校の文化祭でちらし寿司・きつね寿司(稲荷寿司)・うどん・ぜんざいなどを売り、とても楽しかった。売り上げは学校の機器購入に充てられていた。

文化祭の時に大妻先生と火鉢を囲んでお話をする機会があり、先生の学生時代の苦労話を聞かせていただいた。

「辛いときも笑顔を忘れずにつこりしよう」、「らしくあれ」、「丁寧な言葉遣いをするように」などお作法のことを学んだ。

大妻先生は偉大な方だが、威張らない方だった。

④60代・女性・1967(昭和42)年師範科卒業

中学卒業後に大妻女子専門学校本科に入学、同時に世羅高校の定時制にも入学しダブルスクールで学んだ。高校3年間の間に、大妻女子専門学校で本科2年・研究科1年で学び、高校卒業後は師範科で1年学んだ。

当時の大妻女子専門学校は隆盛の一途にあり、学生寮も完備され岡山県から学びに来ている人もいた。

ダブルスクールで学んでいる方は数名あり、一級上の方は和裁の学校を開いた方もある。

大妻女子専門学校の教室に「人は大きく己は小さく心は丸く気は長く」とコタカ先生揮毫書が掲げられていたのが印象深い。大妻女子専門学校での学びは人生の宝物である。

⑤60代・女性・1967(昭和42)年研究科卒業

中学卒業後に大妻女子専門学校本科に入学、本科1年生の時は中学校時代の制服を着て登校し、2年生になった時は授業で制作をしたシングルの上着の制服を着て登校した。それまで何もできなかった娘の制服姿を見て母は喜んだ。

国語や音楽の授業は世羅高校の先生が来ていた。お茶やお花の授業は、プロの先生が指導してくださった。

研究科を経て卒業後は地元のスーパーに就職し、洋裁の知識があるからということで社員用の制服を扱う業務に就くことができた。

人生において大妻女子専門学校で学んだことがとても役に立っている。親はもちろん、先生方に感謝している。

⑥60代・女性・1969(昭和44)年師範科卒業

世羅高校を卒業後、大妻女子専門学校の師範科で学び、卒業後、大妻女子大学の事務に一年間勤めた。当時は結婚前に東京に出る体験をさせるシステムがあった。大妻ではお部屋の子と一緒に生活をし、学生課で事務の仕事をした。

大妻で教育を受けたからこそ体験できることであった。

⑦60代・女性・世羅高校から大妻女子大学へ

世羅高校を卒業後、大妻中高の先生をしていた山尾先生宅でお手伝いをしながら短大家政の2部で学び1971(昭和46)年卒業した。

山尾先生は自宅敷地内に離れを建ててくださり、東京にいる間、映画・相撲・歌舞伎といった文化施設に連れて行ってくださった。

⑧60代・女性・娘が大妻女子専門学校から大妻女子大学へ

世羅高校を卒業後、大妻女子専門学校師範科を卒業後、大妻女子大学短期大学で学んだ。大妻学院の理事であった柏木先生のご自宅に下宿をさせていただいた。

卒業後は、広島県の高等学校の教員として勤務した。

⑨80代・女性・義母が大妻女子専門学校の先生

義母は昭和27~44年まで和裁の先生として大妻女子専門学校に勤めており、義父が亡くなった後、大妻女子専門学校の先生、学生に離れの部屋を貸していた。

大妻コタカ先生もよく泊まりに来ており、義母は足の不自由なコタカ先生のために当時和式だったトイレを大工さんに頼んで改造した。

(2) 一般

①90代・男性・世羅町居住

子供の頃、大人は子供の躰として、コタカさんが幼少期に川尻から山道を独りで歩いて通った話をよくしていた。手に木綿針を握りしめて歩いたことを耳にし、昔の大人は四書五経の教えなどもふくめて諭したものだ。

人は偉くなるとふるさとを没却し顧みないが、大妻コタカさんは大成したがふるさとを大切にされ素晴らしい人だ。

②80代・女性・老人クラブ

コタカさんが本郷の学校に行っていた時、下宿をしていたのは信実正夫さん宅だった。コタカさんは頑固者だったと聞いている。

③60代・男性・自治センター職員

この地域では昔、米ではなく麦を主食としていた。麦は米と違い収穫後に自宅まで運び、庭に8段から10段の高いハダをこしらえて干していた。コタカ先生の子供の頃のエピソードに刈り取った生麦の束を背負ってとあるように麦は家に運んだものだ。

麦干しは、昼の農作業後、月の光で夜なべして取りかかる作業で、子供には辛いお手伝いだった。

④80代・男性・旧久恵出身者

コタカ先生の生家は他の家よりも大きい家だった。裏に味噌蔵があり、ザクロの木があり、子供時代木登りをしていただいた。

コタカ先生と祖母が友人だったので、コタカ先生が東京から帰ってくると必ず祖母を訪ねていた。その時東京の珍しいお菓子をいただくことができ、とても楽しみだった。

II 大妻コタカとふるさと世羅のつながり

聞き取り調査による大妻コタカとふるさと世羅とのつながりを以下に示した。

1) 聞き取り調査により「婦人会などで子供の頃から親に連れられ大妻コタカ先生の講話を聞くことがあった。何げないことをいろいろ教えてください。大妻先生の話を聞けば、みな先生の魅力に引きつけられたものだった」とある。

講演会などで直接大妻コタカに接し、その人柄に魅了された父母または指導者に勧められ、大妻女子専門学校に進学する者が増加したことがわかった。

大妻コタカが世羅で講演をした記録は、広島県立世羅高等学校創立百周年記念誌編集委員会

(1996)『世羅高等学校創立百周年記念誌』広島県立世羅高等学校。第二章沿革史に見ることができる。

大妻コタカが最初に登場するのは、1920(大正9)年11月16日卒業生大妻コタカ女史来校・講演されとある。卒業生と記されているのは、コタカが通った多田道子裁縫所は、その後変遷を経て広島県立甲山高等女学校となり、現在の広島県立世羅高等学校の前身であるためである。

1922(大正11)年の記載には、11月4日に新校舎が竣工、11月7日大妻技芸学校校長夫妻来校・午後大妻コタカ女史講演されるとあり、ここではコタカを卒業生ではなく大妻技芸学校校長と記されている。また、大妻学校校主である大妻良馬が

世羅を訪問した記録で、大妻学院にはない貴重な記録ある。

1923(大正12)年、関東大震災により大妻学校は壊滅的被害を受けた。『世羅高等学校創立百周年記念誌』でみると10月に甲山高等女学校が大妻技芸学校へ災害義捐金を送った記録をみることが出来る。

関東大震災後の数年後、1929(昭和4)年大妻良馬が逝去し、世羅におけるコタカの講演記録は1939(昭和14)年7月まで見当たらない。

1940(昭和15)年と1941(昭和16)年には卒業生も聴講する大妻コタカの講演が行われている。この時期コタカは村岡花子・与謝野晶子・柳澤白蓮らと世の中を行く女性として活躍しており、この活躍が世羅に於いても周知のことである様子は、コタカを囲んだ講演の時の写真が『世羅高等学校創立百周年記念誌』に掲載されていることから分かる。

『世羅高等学校創立百周年記念誌』により、大妻コタカとふるさと世羅のつながりが、大正時代からあったことを把握することができる。

戦中戦後も大妻コタカを招き、世羅地域の学校をはじめとする各所で講演が行われている。そしてコタカが講演に来た際、「東京に来て大妻でもって学びなさい」とコタカに声をかけられ、東京の大妻で学び、卒業後地元に戻り、大妻コタカの精神を引き継ぎ社会に貢献された方もあると新たな情報を得た。

本研究を発展させるために、コタカ自身の言動だけでなく、コタカから学んだ多くの門下生たちが、どのように大妻精神を引き継ぎ、どのように社会貢献したかを明らかにする必要がある。

2) 聞き取り調査により、1952(昭和27)年に設立された「甲山町立高等技芸学校」は、創立期の大妻コタカと熊田睦(磯崎)の壮絶な粒々辛苦により発展し、後に大妻の名前を入れた「甲山町大妻女子専門学校」「甲山町・世羅町学校組合立大妻女子専門学校」と改称し、世羅の女子教育に貢献したことが分かった。

創立期の壮絶な粒々辛苦時代のコタカの心情が、大妻学院(1989)『大妻学院八十年史』ぎょうせい。に記されている。以下に示す。

熊田睦(磯崎)は、この当時のことについて、コタカは18年間全く無報酬で奉仕し、当地での宿泊の際なども旅館などには全く泊まらず、いつも

私ども教育と宿直室に寝泊りし、常に「人の為にするのではなく、させていただける自分に感謝している」と言っていたという。このようなコタカを見て、「心の広い無欲の人生に徹した器の大きい人だと感じさせられた」と述懐している。

大妻コタカを知るためには、今後の研究で熊田睦（磯崎）についても明らかにしておく必要がある。

3. まとめと今後の課題

【まとめ】

本研究では、「出張博物館」を大妻コタカのふるさと広島県世羅町の『大田庄歴史館』に於いてこれまでの調査成果をふまえた大妻教育の展示を行うことで、大妻コタカに関心のある方々に来場いただき、これまで知り合うことのできなかつた大妻コタカと関わった方、世羅町に所在した大妻女子専門学校で学んだ方々などの新たな聞き取り対象者を獲得し、次年度以降の聞き取り調査により大妻コタカが社会に果たしてきた役割、大妻精神を新たな側面から明らかにし、大妻精神の継承と具現、発展する方法を模索することを目的とした。

展示を通じ、本研究の趣旨を理解いただき、新たな聞き取り調査対象者を獲得することができた。

また、本展示を紹介する数回の新聞報道により、想定外に広く多くの方に「大妻」を知っていただくこととなり、展示に足を運ぶことが出来なかつた大妻コタカゆかりの方から連絡をいただき、新たな聞き取り対象者の獲得もすることができた。

以前、町立大妻女子専門学校を昭和37年に卒業した方に聞き取り調査をしたことがあるが、それによると卒業後の就職は先生（熊田睦）が世話をし、先生が就職先となる大阪、名古屋、横浜などの会社まで付き添い、就職後も卒業生を案じて、就職先地域の会社の会議室など借用可能スペース確保の段取りをつけ、折を見て先生が各地に出向き親睦会（同窓会）を行い近況報告などがされた。

就職先は、時代的に縫製工場などが多く、学校で学んだことを活かすことができる職場であった。「町立大妻女子専門学校での学びの良さ」の問いには、先々を見据えて親身になって卒業生の面倒をみた先生の姿からも学ぶところが多くあったと回答された。

今回の聞き取り調査でも、町立大妻女子専門学校で学んだことは、人生において役に立ち、今も

なお働き続けることができていると回答された方が多く、大妻コタカの「いつでも何処でも何からでも学べ」の教えは受け入れられていることがわかった。

【今後の課題】

2020年、学祖大妻コタカの没後50年を迎える。時が過ぎ、大妻コタカと関わった方も高齢となり、大妻コタカに関する聞き取り調査も時間の猶予が無くなってしまった。新たに得た調査対象者への聞き取りも一刻を争い実施する必要に迫られてきている。

大妻コタカとどのように関わり、大妻コタカから得た教えはそれぞれの人生にどのように影響を与えたかを明らかにし、大妻精神の継承と大妻精神を発展させるために早急に聞き取り調査を行うことが必要である。

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成（K3005）をうけたものです。